

---

# オレはメイドだ

冷えピタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレはメイドだ

### 【Nコード】

N3472BA

### 【作者名】

冷えピタ

### 【あらすじ】

日本に存在する法律の効かない無法地帯 禁止区域で生まれ、赤ん坊の頃に母親を目の前で殺された少女。

少女は運良くある男に拾われ、禁止区域で生きるための術を身に付けていく。

そして卓越した身体能力と身に付けた戦闘技術によって、少女は奪われる側から奪う側へと進化していった。

そして現在 血に濡れた少女は、なぜか二階堂の屋敷でメイドをやっていた。

若干チート？原作崩壊もあるよ！原作ファンの方は十分に注意した上で読んでください。

## 01 オレはメイドだ(前書き)

連載一つ抱えてるのになにやってんだー！

ごめんなさい、気分転換です。

こっちは気が向いたら更新って形ですので、  
気長にお待ちください  
ね

## 01 オレはメイドだ

オレが生まれて最初に目にしたのは、血の海に沈む母親らしき人間の成れの果てだった。

赤ん坊の頃の記憶だが、この歳になっても消え去ることは無く脳裏に焼き付いて離れない。

父親は居なかった。母とオレを残して姿を消したのか、それとも死んだのかは定かではない。

偶然その場を通りかかった男に拾われて、命を救われた。つくづく思うのだが、オレは本当に運がいい。

オレが育ったその場所は、社会の常識が通用しない無法者たちの巢窟。

弱者であれば男は鬨り殺しにされ、女子供は犯される。強者こそが正義。強者こそが全て。

そんな世界で生きてきて、五体満足で今この時を生きている。なんともまあ運がいいとは思わないだろうか。

度重なる幸運      オレは運によって生かされているといっても過言ではない。

赤ん坊の頃に男に救われ、生きる術を教わることが出来た幸運。

男から課せられた生きる術という名の訓練は、決して楽なことではなかった。流石に死ぬ、と本気で覚悟したことも一度や二度ではなかった。

けれどその訓練によってオレは奪われる存在から、奪う存在へと進

化した。

まだ10歳にも満たない子供が、成人をとっくに迎えた大人たちを蹂躪する。

それ自体必ずしも珍しいことではない。大人だろうが子供だろうが、そこに関係するのは歳の差ではなく力量の差。

そして幸か不幸か、その場所でオレ自身よりも強い敵に出会うことがなかった幸運。

……いや、後者だけは少し違うか。一度だけ、オレより強い人間に出会った。

まだ子供の頃の話になるが、それでもオレに敵う者は育ての親である男以外には存在しなくなっていた。

十分な食事など得ることは難しいその場所で生きるには、他者から奪うことが基本だ。

殺すことを躊躇ってはいけない。もし見逃せば、食糧を奪われたことでオレに恨みを持って仕返しをしに来る可能性もある。

明日は我が身　　決してそれを忘れるな、と常々教えられていた。

けれどオレはそのことを余り重要視することはなかった。当たり前だ。オレに敵うやつなど居ないと思っていたから。

例え仕返しに来たとしても、また踏みにはじればいい。何人もの仲間を連れてこようが同じこと。

10人や20人が相手だったとしても、決して負けるとは思っていない。

それだけの自信があったのだ。

有頂天になっていたのだろうか。自分こそが他者を踏みにじることが出来る唯一の存在だと、慢心していたのだろうか。

そんなオレを、死神が断罪しに来た。

あの時は本当に死を覚悟したものだ。この世に生を受けてからというもの、一度も感じたことのないほどの圧倒的な死の気配。

オレという存在が、道端でもかく羽虫のようなちっぽけなものに見えてしまうほどの力の差。

足は無様に震え、呼吸が乱れた。心臓がビートを刻み、比喻でもなくてもなく本当に破裂してしまうのではないかとさえ思えた。

知らず知らずのうちに瞳からは涙が零れだし、オレの口はひとりでに命乞いの言葉を発していた。

『ごめん、なさい　　たすけてください。たすけて、たすけてください…！』

震えるオレを無言で見下ろす男は、身長が190センチにも届こうかという巨漢。

鍛え抜かれたその体には筋肉が鎧となり、大人が大勢で襲いかかるうがびくとも動かないであろうことが想像できた。

こいつを殺すには銃が一丁あっても勝てはしない。どうしても殺したいのなら、それこそ軍隊でも呼んでこないといけないだろう。

けれどオレには、軍隊から放たれる無数の銃弾の嵐の中にあってもなお、この男が倒れると言うイメージが湧くことはなかった。

不死身……そう言うにはあまりにもオカルトじみているかもしれない。どれだけ強かろうと一個の人間である。

先ほどの自分の言葉を否定することになるが、実際は拳銃一つで事足りるだろう。

けれど男から放たれる威圧感が、それを肯定させない。

死なない。殺せない。無言で佇む男から、そんな感情が伝わってきた気がする。

彫りの深い顔から覗く、肉食獣のように鋭い二つの眼から放たれる刺すような視線が、幼い頃のオレには死刑宣告のようにも思われた。

『……………去れ』

男は短く、それだけを告げた。

どうして見逃してくれるのか、そんなことは分からなかった。

捕まり、身ぐるみを剥かれた拳銃、殺される。それがここでの常識だったからだ。

けれどその疑問を解消しようとは思わなかった。

ただただ命が助かったことだけを喜び、オレは一目散に暗がりへと姿を消した。

それからその男とは一度も会っていない。それは喜ばしいことである。

もし再び出会うようなことがあったなら、今度こそオレの命運は尽



きていただろうから。

そして今オレが生きている、この日常と出会うことも無かっただろう。

静かに瞼を開く。

天井に備え付けられた明かりが目に入る。

ふと視線を窓の外にやれば、もう太陽が顔を出していた。

「やばい……寝過ぎしたな。またツキから小言を言われる」

時間に遅れているという自覚はあるが、決して急ごうとはしない。ゆっくりと起き上がり、部屋の隅にあるクローゼットからオレの仕事服を取り出す。

慣れた手つきで寝間着から着替え、鏡の前に立った。

そこには、なんとも眠た気な表情でこちらを見つめる、メイド服に身を包んだ黒髪の美少女の姿があった。

オレの動きに合わせて、鏡の中の少女も動く。

「ふむ。今日も美少女だなオレは」

なんて馬鹿なことを言いつつ、意識の外へと押しやっていた部屋のドアの叩く音へと目を向ける。

「いつまで寝てるか。とっくに朝食の準備は終わってる」

「悪いな、今起きたところだ」

ガチャ、とドアノブを回すと、そこに居たのはオレより小柄な少女の姿。

オレと同じメイド服に身を包んだ少女の名前はツキ。オレよりずっと早くこの屋敷に仕えているメイドだ。

だがオレなんかのような一介のメイドとは違い、ツキはメイド長という胸にPADでも詰めてそうな役職がある。

「……どこ見てるか、桜」

「いや、今日もツキはちっばいだなと思って」

「ちっばいどころか、まな板の桜に言われたくない」

「オレって着やせするタイプなんだよ」

「一緒にお風呂に入った時のこと覚えてる」

「……さあ、はやく行こうぜ。飯が冷めちゃまずくなるだろ」

都合の悪い話題を出され、そそくさと食堂の方へと立ち去ろうとするオレをツキが呼び止める。

「何言ってるか。今はお嬢様たちがお食事中。私たち使用人は後」

「ええー、腹減ってるんだよ。それに麗華から一緒に食ってもいいって許可出てるだろ」

「旦那様が見たらお怒りになる」

麗華、とはこの屋敷に住むお嬢様の名前だ。

二階堂 麗華。日本でも有名な資産家、二階堂家の長女。なかなかキツイ性格をしているが、逆にそこが気に入っている。思ったことを何でもズバズバと言ってくるあの態度は、他のお嬢様にはなかなか見られないタイプだ。

麗華の妹に、彩というお嬢様がいる。

ちっばいツキにも勝てないほどの貧乳な麗華と違い、こっちは爆弾を胸に抱えている。

恐らく爆弾の中央にある小さなボタンを押せば、この屋敷が吹き飛ばに違いない。

むしろオレの首が飛ばされることになるだろう。

そしてツキが口にした旦那様とは、麗華の父親でこの屋敷の主人である二階堂源蔵のことだ。

娘想いな良い父親であるが、オレが言うのもなんだが不器用な男だ。周囲に対して高圧的な態度を取っていることもあり、屋敷の使用人

たちからも恐れられている。

まさに屋敷に住まう大魔王である。

不真面目なオレをオッサンは心底嫌っているらしく、いつも小言を言われる。

まあ不真面目なのは自覚しているし、理解できない話でもないが。

その後、無視して食堂に行こうとしたオレの首根っこをツキに捕まえられて、ずるずると使用人室に引っ張られていった。

結局朝飯にありつけたのは、麗華と彩が食事を終えた一時間後だった。

使用人たちが集まって朝食を楽しむ。

だが、オレとツキの二人が座っているテーブルの周りには他のメイドの姿はない。

オレたちからかなり離れたところで、他のメイドたちが固まって食事を取っていた。

「……あの、桜」

「なんだ？」

「私のことは気にせずに、みんなとご飯食べてもいい」

「あ？ 別にオレはあいつらと群れて食べようなんて欠片も思っ  
ねーよ。ツキと食べてたほうが百倍マシだ」

申し訳なさそうなツキの言葉を聞きながら、さして気にした素振り  
もなくスープをスプーンで口に運ぶ。

……う、カボチャのスープか。オレ、カボチャ嫌いなんだけどな。

「物好きやね」

「言ってる」

ニヤリ、と笑みを浮かべるツキ。

まったく、こいつも不器用な性格をしてやがる。

心の底では誰よりも寂しがっているくせに、つまらない意地を張っ  
ているんだろう。

オレがこの屋敷に初めて来た時も、ツキは一人で飯を食っていた。  
それを他のメイドは心配する素振りもなく、むしろいい気味だと言  
わんばかりの嘲笑の笑みを浮かべていたのを覚えている。

俺はそれが気に食わなかった。見ず知らずの少女の現状に対して、  
どういう訳かは分らんが、とにかく気に食わなかったのだ。

それからというもの、オレはツキに積極的に話しかけるようになった。  
た。

最初はどこかよそよそしい態度だったツキも、日が経つにつれてだ  
んだんと心を開いていった。

あまり接点の無かった麗華や彩とも、ツキと親しそうに話をしている俺に興味を持ってあちらから話かけてきた。

そして今日は俺が働き始めて丁度半年。それと同時に麗華が通う学園の始業式……つまりボディーガードが決定する日だ。

資産家が多いこの町では、ボディーガードを育成する学園が存在する。

成長が著しい十代の頃から、ボディーガードとしてのノウハウを叩きこもうということらしい。

ボディーガード訓練生が二年生になると、同じ学園に通う資産家の令嬢を守ることになる。

ボディーガード訓練生の実力に合わせて、危険度が高いお嬢様に割り当てられていく。

ここで言う危険度とは、お嬢様自身のことではない。いや、麗華なら危険度は高そうだが、そうではない。

資産家の娘であるお嬢様には様々な危険が付きまとう。誘拐や暗殺……その他諸々。

特に麗華などは学園に通うお嬢様の中でもかなりトップレベルの資産家の娘だ。相応の実力者があてがわれることになるだろう。

「でも、大丈夫かよ？」

「……いきなり何言い出すか。ちゃんと目的語を言う」

「いや、訓練生とはいえ、ボディーガードを麗華が自分の傍に置くと思うか？」

「それは」

ツギが苦々しそうな表情をする。

麗華は超が付くほどのボディーガード嫌いだ。

オッサンが用意したプロのボディーガードたちも、麗華の我が儘で一週間と待たずに辞めさせられている。

麗華が言うには、パーソナル……なんだっけか。とにかく、パーソナルなんかがつんちゃらかんちゃらで、見知らぬ人間が傍に居ることが我慢できないらしい。

休日に外出する時にはオレとツギの二人が付き添っているが、ボディーガードの訓練など受けていないオレと、そもそも一般人であるツギには護衛など務まるはずもなく。

学園への登校に至っては、麗華は完全に一人だ。

彩は車で送迎されているが、麗華は歩くのが好きなので徒歩で登校している。

日本で最も犯罪数の少ない町であることには違いないのだが、あまりにも不用心である。

「とにかく、麗華お嬢様が納得の出来る人物が現れてくれるのを待つだけ」

「それしかないよなあ。でも麗華が納得できるボディガードなんて、この世に存在すんのか？」

ボディガードとは概して堅物が多い。

与えられた任務を私情を挟まずに遂行し、常に礼儀正しく、常に謙虚に……。

うん、無理だな。

そういうのは、麗華が一番嫌いとする人種だ。

これまで雇ったプロのボディガードも、みんなそういうタイプだった。

それに反したボディガードなど居るはずもない。もし居たとしても、オッサンが認めるはずもない。

彩もあれでいて人見知りをするタイプだから、見ず知らずの人物と一日中生活を共にするのはかなり厳しいだろう。

すっ、と開いていた窓から、小さく風が吹き込んできた。それがオレの前髪を小さく揺らした。

「なんか……面白くなりそうな予感がする」



くくつ、と喉を鳴らす。

そんなオレを見て、ツキが若干後ろに引く。

「電波受信？」

「ちげーよ！」

「やっぱり、桜がとある組織から送り込まれてきたスパイという説は当たってたか」

「なにその説、初耳なんだけど」

「私が作りました、えっへん」

「お前、電波でも受信してるのか？」

「凹む」

屋敷に吹いた小さな風。

それがどんな変化を屋敷にもたらすのか……

どちらにせよ、騒がしくなることは間違いないか。

そのせいでオッサンの機嫌がより一層悪くなることも、間違いではないだろう。

「夜な夜な桜が誰か宛にメールを送っているのも、その組織への情

報提供……！？」

「まだやってたのか、お前」

## 02 海斗はボディーガードだ

屋敷の二階の廊下をせっせと箒で掃く。  
隅々までしつかりと、だ。手を抜けば後で皺寄せが来ることは分かっている。

「お、ラッキー」

廊下に落ちていた500円玉を拾い上げる。  
誰の物かは知らないが、オレが見つけてオレが拾った物だ。つまりこの500円玉は俺の所有物ということになる。  
普段から小銭を拾うことは珍しくない。  
外出した時には財布を拾うこともある。その場合は流石に中身を確認して、持ち主の情報がないかを確かめたりしているが。  
まさに幸運様々である。

「……………ん？」

ふと窓から庭の様子を見ると、麗華が佐竹と見知らぬ青年を連れて歩いてくるのが見えた。

佐竹とは、ボディーガード訓練学校の校長である。  
大柄な体格にスキンヘッド、それにいつもサングラスをかけており、どこぞのヤクザの親分といった風貌だ。

それにしても、あの男はこの誰なんだろう。  
屋敷に一度でも足を運んだ人物の顔は完全に覚えている。が、その男の顔は俺の記憶の中にはヒットしなかった。

真実を確かめる為、箒を廊下に立て掛けて、一階へと歩を進めた。

「あ、桜……」

「よう」

食堂の扉の前に立っていたツキに声を掛ける。

「大変。麗華お嬢様が自分からボディーガードを連れてきた」

「へえ〜………つてマジで!？」

それは一大事だ。明日は雪どころか流星群が降ってもおかしくはない。

あのボディーガード嫌いの麗華が……。

先ほど見た男が、そのボディーガードなのだろうか。

しばらくすると、食堂の中から何やら言い争うような声が聞こえてきた。

「少し行ってくる」

「え………ちょ、ちよっと待つ!」

ツキの静止の声を振り切り、オレは食堂へと足を踏み入れた。

食堂の中に入ると、麗華と先ほどの青年の視線がオレに向けられる。

「あら、桜。もう起きてたの？」

「いやいや、もう昼だから。お前の中でのオレはどんだけお寝坊さんなんだコラ」

心底意外だと言わんばかりの表情で尋ねてくる麗華に、少々メンチを切りながら話す。

オッサンに見つかれば一発で首の状況だろうが、食堂の周りに人間の気配はツキのものしかない。

「主人にタメ口で話すメイドなんて聞いたことねーぞ」

先ほどまでオレの行動を伺っていた青年が、呆れた様子で口を開く。

「あ？ここに居るだろうが。統計学的な数値だけで全てを測れると思うなよ」

メイド服のスカートの中から取り出した拳銃をちらつかせる。

「おい、なんでメイドがそんな物騒な物持ってたんだよ」

……ほう。普通の人間なら拳銃を見て怖がりそうなものだが、この青年の表情から恐れという感情は読み取れない。

むしろ普段は滅多にお目に掛かれないだろう生の拳銃を見て、興味津々といった様子だ。

「桜はちょっと特別なの。あんたがいちいち気にするようなことじゃないわ」

普段からオレが拳銃やナイフなどを持ち歩いていることを知っている麗華は、さして気にした素振りも見せずにいる。

最初に見られた時は一悶着あったものの、慣れとは怖いものである。

「はあん」

麗華を横目で見つっ、青年は生返事を返す。

納得した、というよりもむしろ、どうでもいい、と言った感じだ。

「あなたにも紹介しておくわね。この子はうちでメイドをしてきている桜よ」

それで桜、こつちのアホ面しているこいつは朝霧海斗。今日から私のボディーガードになる男よ」

「おい待て、俺はお前のボディーガードになるなんて納得した覚えはないぞ」

朝霧海斗と呼ばれた青年……人を苗字で呼ぶことなどめったにないので、海斗と呼ぶことにする。

海斗はうんざりとした様子で、食堂のテーブルの上に足を投げ出した。

「桜」

「あいあい」

麗華から目配せされたオレは、一瞬で海斗の背後に詰め寄って後頭部に銃口を突き立てる。

「なんの真似だ、これは」

「生憎、お前にボディーガードになってもらわなければ、オレの休日　もとい、麗華の身に危険が及んだ時に傍にいてくれる人間が居なくなる」

「今思いつきり本音が出てなかったか？」

「気のせいだ」

カチツ、という音を鳴らしながら拳銃の安全装置を取り外す。そして指はトリガーへ。少し力を込めるだけで、海斗という人間の魂は天に召されることになるだろう。アーメン。

「待て待て、話せば分かる。何が望みだ」

「オレだってこんなことは出来るだけしたくないんだがよ。頼むから麗華のボディーガードになってくれねえか？　答えは『Yes』か『はい』だ」

「人に頼む人間の態度とは思えないな。どちらかといえば脅迫か？」

「そうとも言う」

海斗がゆっくりとこちら側を振り向く。

別に『Freeze! 動くと思つぜ?』なんて言つたつもりはないので、特に動かれようが問題ない。  
問題はない…のだが……。

「おい、てめえどこ見てやがる」

「麗華もかなり小さいとは思っていたが……」

一呼吸置いて、海斗は同情するような視線を向けてきた。

オレに　　ではない。

オレの、胸に。

「お前……本当に女なのか?」



ガァン！ガァン！ガァン！

「うおっ！？」

立て続けに三発、海斗の額に目掛けてトリガーを引く。  
海斗は咄嗟に身をかがめて、銃弾の直線上から回避する。

「屋敷の中で本当に銃ぶつ放すなんて、どんな躰されてんだこのクソメイドは！」

「はっはっは。小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？」

「冗談じゃ、ねえぞ……！！」

食堂の中を必死で逃げ回る海斗。笑いながら追いかけて銃を乱射するオレ。

そんな風景を見た麗華は青筋を立ててこめかみを押さた。

「今年に入って、これで屋敷の修理が三十二件目ね……」

苦々しく呟いた麗華の言葉は、暴れまわるオレたちの耳には届かなかった。

結局、途中で仲介に入った佐竹によってオレはその場から連行された。

そして自室で謹慎。まったく暇な時間だった。

後から聞いた話によると、海斗は自分からまんまと墓穴を掘って、麗華のボディガードになることが決定したらしい。

ふん、いい気味だ。先ほどの胸の件については、後日とことん礼をしてもらうことにしよう。

「ふあゝあ。もう寝るか」

外はもう真っ暗だ。恐らく使用人たちも仕事を止め、自宅通いの者は帰路についていることだろう。

オレやツキを含めた使用人の大部分は住み込みで働いているため、一人ずつ個室が与えられている。

ちなみにオレの部屋はツキの部屋の隣。隣から夜な夜な変な喘ぎ声が聞こえる……と思っていた時期がオレにもありました。

ツキはこの屋敷の誰よりも遅くまで起きていて、更に誰よりも早く目を覚ます。

ツキが就寝する頃にはオレはとっくに夢の中でケンドー 林と殴り合いの喧嘩をしている。

「おっと、その前に……」

いつもの日課である、そーちゃんへのメールを忘れていた。

そーちゃんとはオレのメール友達だ。イケイケの女子高生風に言えばメル友。なんだかナウい感じがするな。

毎日、こうやって今日あったことを面白おかしくそーちゃんに報告している。

そーちゃんは昼間は仕事で忙しいので、こうやって夜にメールをしているわけだ。

「今日は色々あったからな」

カチカチカチツ、と使い慣れた携帯を操作し、メールの文章を作成する。

宛先：そーちゃん

件名：糞蛆虫野郎が屋敷にきました。

本文：

我らメイドの憧れの主人である麗華お嬢様が、本日ビチクソ蛆虫をボディーガードとして連れてきてくれやりました。

あるうことが青色ゾウリムシ野郎は、私の胸をガン見して、その上でふざけたことを抜かしやりました。

今日は銃の手入れが悪かったので害虫駆除にまでは至りませんでし

だが、いつか絶対にあの虫の体液を使って書道家としての一步を踏み出したい思っています。  
それではお体に気を付けて。

ミス・ブロッサムより

「これでよし、と」

メールを送信したことを確認して、携帯をベッドの上に放り投げる。それに続いてオレも体を投げ出すようにして、ベッドにダイブ。

「あゝあゝ、この時のために生きているううゝ！」

オヤジ臭い声を出しながら布団に顔を埋める。

この感触、この匂い。オレを睡眠と言う名の快樂へ誘おうとして放さない。

今日一日頑張ってきた苦勞が、布団の中へと吸収されていく感覚。

「最高だ……オレは布団と結婚する」

愛しの彼（布団）と抱き合いながら、オレの意識は闇へと落ちて行った。

### 03 尊は童貞だ

海斗が屋敷に来た翌日、彩も学園から指定されたボディーガードを連れてきた。

名前は宮川尊徳<sup>たかのり</sup>。決してソントクではない。

最初に名前を見た時にはオレもソントクと読んでしまったが……。

海斗は彼のことを尊<sup>そん</sup>と呼んでいるようなので、オレもそれに便乗させてもらうことにする。

「うーす」

与えられた自室で休んでいた尊の部屋に入り込み、ベッドに腰掛け  
ている尊に向けて口を開く。

尊は突然部屋に侵入してきたオレに対し、警戒心を露わにしている  
ようだ。

「おい、貴様何者だ？ というより、勝手に僕の部屋に入るんじゃないー！」

「まあまあ、今日から同じ屋敷に住む仲間なんだからこのくらい許  
してくれよ」

尊のやかましい怒鳴り声が響く。

まったく、この程度でピリピリしやがって。カルシウムが足りないんじゃないのか？

「貴様……見たところメイドの様だが、一介のメイドごときがこの僕に一体何の用だ？」

「彩のボディガードになる人物が憐桜学園の主席と聞いたからな。どんなやつか気になったんだよ、他意はない」

こいつはあれだな、自分に過度の自信を持っているタイプだろう。初対面にも関わらず相手を見下すような態度からすぐに分かる。

別にそのことに対して怒りやその他の感情が湧くわけでもないのだが。

「ふん、よく知っているじゃないか。まあ、宮川家の名に恥じぬ行いをしたまでだ」

「ほ、宮川ってどこかで聞いた名前だとは思っていたが、まさかあの宮川か」

宮川家とは、代々有力なボディガードを世に送り出している名門の家系だ。

こうして屋敷の中での仕事がほとんどのオレでも、その名前は自然と耳に入ってくる。

「貴様のような下品なメイドでも、一般常識くらいは兼ね備えていたようだな」

「照れるぜ」

「褒めてない！」

それにしても、憐桜学園の首席……か。  
どれほどの力なのか、少し試してみるか。

「あつ」

頭を手で押さえながらふらつき、尊の方へとわざと倒れ込む。  
尊は一瞬だけ驚いたような顔をしていたが、さっと立ち上がった才  
レの体を腕の中に抱き止めた。

動きは悪くないな。咄嗟の出来事にも反応が来ている。

……だが、それでも常人の範囲内だな。

もしオレが懐にナイフでも仕込んでいたとしたら、今で命を失っ  
ていただろう。

所詮は学生か。けどまあ、それ以上のことを高望みするのも悪いか。

「大丈夫か？」

「……ああ、ちょっと貧血気味だな」

「そうか、これだけ広い屋敷で働いているのだから無理もない。  
だが万一ということもある、自分の体調には気を付けておくんだな」

あれ、もしかしてちょっといいやつ？

人のことを見下すだけのプライドの高いお坊ちゃんと思っていたが、  
それだけではないようだ。

「……そろそろいいか？」

「　　ッ!?　　す、すまない!」

尊はようやくオレを腕の中に抱いている状況に気が付いたようだ。顔を真っ赤にしながら、慌ててオレから離れる。

初心だねえ……こいつ、もしかしなくても童貞か。

まあ超絶美少女であるオレの顔を至近距離で見ってしまったのだから年頃の男としては当然の反応だな。

ふむ。それにしてもなかなか面白いやつだな。

「そつだ、一つ聞きたいんだが」

「な、なんだ?　早く用事を済ませてくれ、僕は忙しいっ」

おお、慌ててる慌ててる。余裕がない男はモテないぞ?

そついう必死なところが可愛いという女も居るかもしれないが、オレは興味ないな。

「海斗は学園だとどのくらいの成績なんだ?」

「海斗?　あいつと知り合いだったのか」

「ああ、昨日少しだけ顔を合わせる機会があつてな」

そつ、ずっと気になっていた。

拳銃から放たれた銃弾を避けたあの反射神経。

オレは完全に殺すつもりでいた。オレの胸のことを蔑んだのだから死んでも文句は言えまい。

だが、あいつはそれを避けた。それも掠り傷一つ負わずに。



「海斗の成績は下から五番目だ。試験の時に僕と同じ班になっていなければ、もっと下だっただろうがな」

「……下から五番目だと？」

その成績で、至近距離からの銃弾を避けた？  
有り得ないだろう。憐桜学園は化け物揃いか？

だが今日の前に居る尊は、お世辞にも化け物とは言い難い。

一般人としてはかなりのレベルだろうが、それでも強者と呼ばれる人間たちと比べれば程遠いだろう。

「……お前は銃弾を無傷で避けれるか？」

「銃弾だと？ ……遠くからなら避けられないことはないだろうが、それでも無傷では居られないだろうな」

「そつだよな……」

ということは、昨日のアレはただのまぐれか？

しかし、あいつが食堂の中を逃げ回っている時にもオレは海斗目がけて銃を乱射していた。

そのどれもが避けられていた事実はどうなる？流石にまぐれでは済ませられないだろう。

オレの銃の扱いが下手というわけではない。むしろそこらの警官に比べれば遙かに卓越していると自負しているし、特殊部隊と並んでも見劣りはしないだろう。

「なぜそんなことを尋ねる？」

「いや、ちよつとした興味本意だ。憐桜学園のボディガードがどの位の實力なのかと思つてな」

「流石の僕も銃を持った相手だと敵しいが、素手の相手には誰だろつと負けはしない」

「そつか。学園の首席だもんな」

「当然だ」

もうここには用事はない、そう思つてそそくさと立ち去るつとしたオレを尊が呼び止めた。

「待て。お前、名は？」

「桜だ」

「苗字は？」

「苗字……えーつと、田中だ」

「今適当に思いついただけだろう！」

「ちげーよ。本当に田中なんだつて。田中桜だ」

しばし苦虫を噛んだような顔をしていた尊だが、ふつ、と息を吐いた。

「ふん、まあいい。貴様がどんな苗字をしていようと、僕には関係のないことだ」

「ああそうかよ」

ひらひらと尊に向かって手を振りつつ、オレは尊の部屋を後にした。

宛先：そーちゃん

件名：童貞が屋敷に来ました。

本文：

隣桜学園の首席（笑）の童貞君が、彩お嬢様のボディーガードとして屋敷に住むことになりました。

ボディーガードとして赴任した初日にも関わらず、メイドである私の体をじろじろといやらしい視線で見ってきます。

私のボン・キュツ・ボンな素晴らしいプロポーションが罪なのは分かっていますが、少し不快です。

あ、ちなみに昨日の蛆虫は学園で下から五番目の成績らしいです。蛆虫より下の成績の人たちが不憫でなりません。自殺しなければよいのですが……。

それではまた明日連絡します。夜は温かい恰好で眠ってくださいね。

ミス・ブロッサムより

#### 04 海斗は……巨根だ(前書き)

気が付いたら日間ランキングに入っていました。

気晴らしに書いた手抜き小説がなぜこんなに評価されているのかわからなくて怖い……

## 04 海斗は……巨根だ

メイドとしての午前中の仕事を終え、自室で休憩を取っていた時のこと。

オレはいつものように、趣味であるライトノベルを読んでいた。普通の小説も読まないことはないのだが、個人的にライトノベルの突拍子もない展開が好きである。

「くそつ、いい加減に誰と付き合うか決めちまえよこの駄主人公。いつまでも女の子から囲まれてハーレム気取りとはいい度胸じゃないか」

小説の中の主人公に対して毒を吐く。

ライトノベルの風潮として、主人公の男の子が多数のヒロインに囲まれるというのはお約束だ。

しかし、いつまでも甘い汁ばかり吸っているわけにもいかんだろう。あまりに優柔不断だと、ヒロインのほうから離れて行ってしまっぞ。まあ、そうはいかないのがライトノベルの不思議なところなのだが……。

「ん？」

ガチャ、と自室の扉が開く音が聞こえ、読んでいたライトノベルを閉じて顔を上げる。

そこにはオレが屋敷の中で現時点で嫌いな人物ナンバー1の男……朝霧海斗が立っていた。

「何の用だコラ。淑女の部屋に無断で入るとはいい度胸じゃねーか」

「お前が淑女って柄かよ。全世界の淑女に謝れ」

「……ほう、言うじゃねーか。男としての尊厳を失う覚悟が出来て  
いると見なすぞ？」

開口一番毒を吐いてきた海斗を睨みつける。

……ん？先に毒を吐いたのはお前だろう、って？  
アホか。美少女は何をやっても許されるって法律で決まってるんだよ。  
ちゃんと義務教育受けてきたのか？

「まあいいや。で、何の用だよ？こっちは今、大事な大事なプライ  
ベートタイムなんだが」

「ああ……麗華にお前のことを聞いてな。なんでも、小説が趣味ら  
しいな？」

「小説って言っても、ライトノベルだけだな」

「ライトノベル？」

聞いたことのない単語だ、と首を傾げる海斗に、今読んでいたライ  
トノベルを差し出す。

それを受け取り表紙を見ると、海斗の頬が引きつった。

「おいなんだこれ。なんで小説の表紙一面に女の子の絵が描かれて  
るんだよ」

「うるせーな、そういうモンなんだから仕方ねーだろうが」

「はぁん。……で、これはどんな話なんだ？」

パラパラと本を捲りながら尋ねる海斗に、眉を潜めながら答える。

「ボディーガードとして落ちこぼれの主人公が、ひよんなことから有名な資産家のお嬢様の目に留まって、そのお嬢様のボディーガードとして波乱万丈な日常を過ごさずって話だ」

「……どっかで聞いたような話だな」

「大抵はそんなもんだろ」

海斗はそのまましばらく本を読んでいたが、突然パタンと本を閉じた。

「なんだ、お気に召さなかったか？」

「いや……まだ冒頭しか読んでねーけど、結構面白いな、これ。しばらく借りててもいいか？」

異常に目をキラキラと輝かせながらオレに詰め寄る海斗。

「別に構わんが……汚すなよ？ オレだってまだ途中までしか読んでないんだから」

「小説を三度の飯より愛しているこの俺にそんな警告は無用だ」

……そうなのか。てっきり活字なんてまったく読まないと思ってたぞ。

人は見かけによらないな。まあ、オレとしては一向に構わないのだ

が。

「それじゃ、ちょっと借りていくな。夜には読み終わると思うから、俺の部屋まで取りに来てくれ」

「いや、借りたんだから自分で返しに　　って、もう居ねえし」

オレが言い終わる前に海斗は部屋から退出していた。海斗の視線はずっと手元のライトノベルに注がれていたことから、きつとオレの話なんて聞えちゃいなかっただろう。

かなりめんどくさいが……仕方ない。取りに行つてやるとするか。

「桜〜！」

廊下を掃除していたオレの名前を遠くから呼ぶ声が聞こえてきた。

振り返れば、彩が小走りでオレの方へと走ってくる。

おおぅ、走るたびに胸の爆弾がぼいんぼいん揺れてる。ファ　ク！  
貧乳の敵め！

だが仮にもオレの雇い主。そんな私怨に満ちた表情で向き合う訳にもいかない。

努めて表情は平常のまま。ただびくびくとこめかみが動いているの



はご愛嬌だ。

「どうした、彩。何の用だ？」

「この前桜が言ってたラノベ、貸してもらいたくて探してみました！」

「ああ……」

そういえば、先ほど海斗に貸したライトノベルの話彩にもしていたな。

彩はとても興味深々な様子でオレの話聞いていたから、今度貸すと約束していたんだった。

「すまん、もう海斗のやつに貸してしまった。今晚返してもらおうから、その時でもいいか？」

「え、海斗さんに？ そうなんだ……残念だなあ」

彩は清楚なお嬢様のような外見をしている。いや、中身だって麗華よりも数億倍はお嬢様らしいと言ってもいいだろう。

しかし彩はこう見えて、かなりのオタク趣味を抱えている。

ゲームは廃人レベルの技量だし、アニメのDVDやライトノベルだつて山のように持っている。

オレがライトノベルに興味を持ったのも、彩の影響だ。

それ以来、互いに新しいラノベを買ってきては交換して読む、というのが普通になっている。

同じ作品を読んで、互いの意見を言い合うというのはとても面白い。自分一人では読んでいても分からなかった奥深さに、彩の一言でハッと気づくこともある。



わんわん泣きながら彩に抱き付く。その際、彩の暴力的な胸に顔を埋めることも忘れない。

ぱふぱふ！ぱふぱふじゃあああ！

その後、偶然通りかかったツキに無理やり引き剥がされるまで、オレは存分に彩の巨乳の感触を味わっていたのでした。

「ふふふん」

鼻歌を歌いながら、屋敷の中を歩く。

もう外は真っ暗。完全に日は沈んでいる。

手には海斗に貸していたものと同じライトノベルの二巻と三巻。

先ほど彩にお小遣いを貰って買ってきたのだ。彩結婚してくれ！

行く先はオレの自室ではなく、海斗の部屋。

一巻を返してもらったついでに、今日本屋で買って来たこれらも貸してやろうというオレのゴッドマザーのような優しさに全米が泣いた。まあ、初日は色々あったが、これからは同じ屋敷で過ごす仲間だ。それに海斗は小説が趣味ということもあり、上手く行けばライトノベル仲間がまた一人増える。

胸の件は水に流すとして、今は前だけ向いて歩いて行こう。オレは



る。

まるで棍棒でも振りながら迫ってくる鬼のようだ。

「ッ！」

尚も近づいてくる海斗の顔面に、手に持っていたライトノベルの二冊を叩きつける。

「痛てえ！ な、なにしやがる！？」

顔を手で押さえながら悲鳴を上げる海斗を無視して、そのまま全裸の海斗の体に蹴りを叩きこむ。

「っ！ 死ねっ！ 死ねっ！ この変態野郎が！！ なんてモノ見せてくれてんだコラアアア！？」

ドカッ、ドカッ、ドカッ

「ちよ、おい！ やめろ、やめて！！！」

「うるさい糞虫が！ せつかく人が仲良くしてやろうと思ってた矢先にこれか！ お前は一生糞虫で決まりだ！」

夜の二階堂の屋敷に、海斗の悲鳴が一晚中響き渡ったという。

#### 04 海斗は……巨根だ(後書き)

ご意見・ご感想等あればぜひ。

みなさまからのメッセージで作者の筆の速度は上がります。当社比  
5%増

## 05 雷太はオタクだ

やあ諸君こんにちは。君らのアイドル桜だ。巷ではミス・ブロッサムと呼ばれているよ。

今日は二階堂のお屋敷から離れて、町の中にある大きなデパートに居る。

え？メイドの仕事はどうしたのか、だって？

んなもん、今日は休みに決まってるだろ。メイド長のツキならまだしも、下っ端メイドであるオレには週二回の休みがある。

今までは休日も麗華に付きっきりだったが、やっとこさ麗華にもボディーガードが出来たからな。

久しぶりの休日！ビバ、休日！

というわけでやって来ましたのはデパートの中にある、やたらと怪しい雰囲気のお店。

周りにはリュックサックから凶器……もとい、ビームサーベル……もとい、アニメのポスターが飛び出している男たちがわんさかと居る。

世間一般で言うところの、オタクという人種の者たちである。

そのオタクたちが集まる店……すなわち、アニメのグッズが売られているオタシヨップというわけだ。

二階堂で働くメイドが何故そんなところに居るのか。別に彩に買物頼まれたわけではない。純粹に、至極純粹かつ明白に、オレの趣味である。

今日はオレが楽しみにしているライトノベル、『魔術少女リリカルこのは』の最新刊の発売日なのだ。

それに合わせてこの店では、ライトノベルを買った客の先着一〇名に限定『ファイトちゃんフィギュア』が付いてくるのだ。

ファイトちゃんとは、魔術少女リリカルこのはに登場するメインキャラクターの女の子であり、魔術少女なのに格闘技しか使わないというちょっと変わった御茶目ちゃん。オレの一番のお気に入りでもある。

この日の為にこつこつと貯金をして、なんとかライトノベル一冊分を買ったための資金が出来上がった。

「ふ、ふふふ……待ってるファイトちゃん。お姉さんが今迎えに行くからねえ」

くくつ、と喉を鳴らしながら、ライトノベルを売っている棚へと足を運ぶ。

「色々と新刊も出てるみたいだな……お金が貯まったら買いに来よう」

後ろ髪を引かれる思いで目に付くライトノベルたちと別れを済まし、目指すは魔術少女リリカルこのはの新刊。

「まずファイトちゃんとお風呂に入るだろ。その次は一緒にご飯。そんでもって夜には　　ぐふふふ」



ファイトちゃんとの熱帯夜を思い浮かべながら笑みを零す。若干周りの客が引いているような気がしなくもなかったが、今はそんなことよりファイトちゃんだ！

魔術少女リリカルこのはが置かれている棚へと到着する。  
しかし

「なん、だと……!?!?」

魔術少女リリカルこのはの新刊だけが、ごっそりと売り切れていた。まるで悪夢でも見たかのように、その場できつくりと頂垂れる。

「お、オレとファイトちゃんの一夏のアバンチュールが……」

ちなみに、今の季節は春である。

店の床でふて寝していたところを店員に見つかり、お説教を受けること一五分。

お説教中、ずっと周りのオタクどもから写メを撮られていた。そんなにメイド服が珍しいのか。

軽く威圧感を込めて睨むと、蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。その際、説教していた店員も若干怯えていたことについては申し訳ないと思った。

「ですから、今後他のお客様のご迷惑になることは謹んでください  
ね」

「分かった。手間を取らせてすまなかつたな」

店員に頭を下げ、店を後にする。

結局限定フィギュアはもらえなかったし、ライトノベルも買えなかつた。

どうしてこんなところで運が悪いのだろうか。海斗とかいう糞虫が屋敷に住み始めてからオレの周りは悪運続きである。

「今年は何年だな。いや、海斗という疫病神のせいか」

とぼとぼと肩を落として帰路を進む。

ああ、新刊も買いそびれたし明日からの仕事のモチベーションが大幅ダウンすることは間違いないだろう。

「……ん？」

ふと前を見れば、件のオタショップの紙袋を手に下げている少年……いや、青年の姿が見えた。

小太りな体型に男としてはかなり低いであろう身長。そして身に纏っている制服は海斗や尊と同じボディーガード訓練生のものだ。

ボディーガードを志す者たちの中にもオタクは居たのか、と物思い

に耽っていた刹那、青年の持つ紙袋からファイトちゃん可愛らしい顔が覗いた。

ま、間違いない！あれは先着十名限定のファイトちゃんフィギュアだ。

急いで青年に駆け寄り、声を掛ける。

「ちょ、ちょっといいか？」

「ん、三次元の女の子が僕に何の用？」

オレを見定めるような目つきで見てくる青年。近寄って分かったが、かなり体臭がキツイ。

あちら側に住んでいたオレからしてみれば気になるほどの匂いじゃないが……一般人からしてみれば我慢できないだろうな。

「その紙袋の中のソレ、ファイトちゃんのフィギュアだよな？」

「え、君みたいなメイドがどうしてファイトちゃんを？」

先ほどからこちらの質問に質問で返してくる男だ。まあ別に構わんが。

「オレ、それがどうしても欲しくてさ……よかったら、譲ってくれないか？金なら払うぞ」

「（リアル俺っ子……だと……）だ、ダメなんだな！僕のファイトちゃんは渡さないんだな！」

「そこをどうにか！」

ばっ！と頭を下げる。

片やどこからどう見てもオタクにしか見えない青年と、片や清楚なメイド服を着た女の子がオタクと思しき青年に必死に頭を下げている姿。

道行く通行人たちが、何事かと立ち止まってオレたちの様子を見つめている。

「なんと言われようとダメなんだな！」

「お願いだ！いや、お願いします！どうしてもそれが必要なんです  
！！！」

うう……オレのファイトちゃんフィギュアが……。この青年の様子から察するに、オレにフィギュアを渡すつもりはないのだろう。

ファイトちゃんとの幸せな時間が訪れることがないと悟ったオレの体は、自然と目尻に涙を溜めはじめていた。

く、くそ！どうしてこんなことで泣かなきゃならんのだ、貧弱な体め！

すると、先ほどからオレたちの様子を眺めていた野次馬たちが声を上げ始めた。

「おい、女の子を泣かすなんて最低だぞ！それでも男か！」

「そつだそつだ！こんなに可愛い女の子が必死に頼み込んでるつていうのに、なんて野郎だ！」

お、お前ら……。

下心丸出しなのはバレバレだが、それでもちよつと嬉しいぞこんちくしょう。

青年の方を見れば、見るからに狼狽えている様子だった。

それは当然だろう。自分の持ち物を守るうとしていただけなのに、いつのまにか周囲から悪者扱いだ。

ちよつと可哀想になってきた。

それでもそのフィギュアが欲しい気持ちは変わらない。自分でも汚いことをしている自覚はあるが、現時点で命の次に大事な物である。

「うう……」

涙混じりの瞳で、上目遣いで青年の顔を見つめる。

すると狼狽えていた青年の顔が、見る見る赤くなつていった。

「(ば、馬鹿な。この僕がリアル三次元女に萌えるはずが……)」

青年はばばっ、と目にも留まらぬ速さで手に持っていた紙袋をオレへと差し出してきた。

「こ、これ！ あげるんだな！」

「え……ぐすつ。いい、のか？」

「いいんだな！ だから、その……君の名前を教えてほしいんだな」

「へ……？ あ、ああ……桜だ」

「……………桜ちゃん(ポツ)」

なんだ、なんなんだ、この展開は。  
男のくせに、まるで恋する乙女のような表情になった青年を見て、  
若干引く。

「僕の名前は奥本雷太なんだな！ それじゃあ、また会おうなんだな！」

「え、あ……うん」

雷太と名乗った青年はオレに紙袋を押し付けるように渡すと、その場から猛スピードで去って行った。

「なんだったんだ、あれ……」

ふと渡された紙袋の中を見ると、欲しかった魔術少女リリカルこのはの新刊と、ファイトちゃんの限定フィギュア。

にぱー、と自分の顔に笑みが広がっていくのが分かる。

お礼の一つでも言いたかったが、雷太の姿はもう見えない。

同じ町に住んでいるのだから、いずれは会うこともあるだろう。

もしもの場合は海斗に言伝を頼むのもいいかもしれない。すごく癪だが。

「よかったね、お嬢ちゃん」

「そうだ、これから俺たちと一緒にお茶でも」

雷太が居なくなっただ途端、急に馴れ馴れしく話しかけてくる男たちを無視して、早足で歩き始める。

「おい、無視すんなって！」

がっ、と肩を掴んできた男の手を取り、そのまま前方へと背負い投げをする。

「え？

くはっ!？」

男は衝撃により意識を失ったようだ。

ふと野次馬たちの方へ視線を向けると、誰もがオレと視線を合わせようとせずにそそくさと立ち去っていく。

助けてもらったが、悪いな。オレとファイトちゃんとのイチャラブタイムを邪魔するやつらには容赦しない。

それ以降、オレにちよっかいを掛けようとする男は居なくなり、スキップをしながら屋敷へと戻ったのだった。

## 06 オッサンは魔王だ（前書き）

皆さま、いつも『オレはメイドだ』を応援くださり誠にありがとうございます。  
ございます。

この度、『オレはメイドだ』の挿絵を描いてくださる絵師さんが決定いたしましたことをこの場をお借りして報告させていただきます。詳しくは私の活動報告に記載しておりますので、興味がある方は覗いてみてください。



## 06 オッサンは魔王だ

今日の天気は小春日和。

庭で小鳥たちが心安らぐメロディーを奏でている最中、オレの心の中ではドラ エのパーティー全滅時のテーマが流れていた。

「またやつちまった……」

目の前で割れている壺……正確には、壺だったものの残骸が散らばっている。

「ザオリク！ザオリクザオリク！」

駄目だ、生き返らない！

そもそも無機物の壺に命など無いわけだし、流石のザオリクでもバラバラになった肉片を生き返らせることなど叶わないだろう。

正直、こういう貴重品の扱いには慣れていない。

壊さないように壊さないように　　そう思えば思うほど、自然と手が震えてしまうのである。

「またお前か……」

「げっ」

背後から怒りに打ち震えた男の声が聞こえてくる。

この屋敷の魔王こと、二階堂源蔵。麗華と彩の父親である。

離れていても分かるほどに、額に血管が浮き出ている。随分とご立腹の様だ。

「どうして貴様はいつもいつも、メイドのくせに屋敷の物を壊すのだ！」

「すまん」

「すまん……じゃない！！ お前が麗華と彩に気に入られてなかったのなら、今すぐにでも首にしてやるところだ！」

毎日のように聞いているオッサンの説教。昨日もまったく同じことを言われた気がする。

これが普通のメイドならオッサンの言うとおり、即刻解雇に繋がるのだが、ツキ繋がりで麗華と彩と親しくなったオレを、オッサンはそう易々とは辞めさせられなくなっていた。

こう言つとなんだか麗華と彩のことを利用しているように聞こえてしまうが、ただ純粹に彼女たちとは友好関係にあるだけなのであしからず。

まあ友情の副産物と理解してくればいいだろう。

怒ると鬼のようなオッサンだが、娘が悲しむような顔は見たくないであろう。娘想いの良い父親である。

それでも先日、随分海斗に辛く当たっており、麗華の機嫌を損ねたようだったが。

……はて。海斗の態度が悪いのは百も承知であるが、オレのような失態をまだ犯した訳でもないのになんでオッサンは海斗に厳しいの

だろうか。

まあ、その辺りはおいおい麗華が彩に尋ねることにして、今は目の前の閻魔大王を片づけるのが先決だ。

「まあまあ、そう怒るなよオッサン。ただでさえ高血圧なのに、そんなに興奮したらばっくり逝っちまうぞ?」

「誰のせいだと思っている、誰の!」

オッサンは先月の健康診断で高血圧と診断されたらしい。高血圧の原因の1%くらいはオレにもあるので素直に謝っておいたが、逆にキレられた。はて?

てつきり朝昼晩スーパー豪華な料理を食べているからだと思っているのだが、違うのだろうか。

考えても答えは出ない。まさに青春の二文字にピッタリな格言である。

それにしても壊した物はちゃんと弁償しているわけだし、今回もそうすれば問題はないだろう。

ふふふ……何を隠そうこのオレは、不景気な時代にも関わらず、月収五十万を貰っている高収入美少女なのだ。

……まあ全て、屋敷の修理代とツキへの借金返済に消えているのだが。

驚くことに最終的にオレの手元に入る金は五十円!う　い棒を五本買えば消失してしまうという恐ろしき事態である。

なのでオレはう　い棒を九円で買えるスーパーに、片道二キロの距離をかけて向かっている訳だが　　今はその話に関係ないので割愛する。

「分かった、オレが悪かった。いつもようにオレの月収から壺の代金を抜いていてくれればいい」

「……貴様、冗談はそのくらいにしておくんだな」

「は？ いやいや、冗談なんて欠片も」

「貴様が今まで壊してきた壺の数を言ってみろ！」

えーっと、昨日二つだろ？一昨日は珍しく壊さなかったけど、三日前にも一つ。四日前に四つと、五日前に

そこまで考えて思考を止める。

「んー、五十個くらいか？」

適当にそう言ったが、あながち間違っているわけでもないらしく、オッサンは苦々しそうな顔をして答えた。

「……正確には五四個だ」

おいしいな、四個違いか。でも仮に当たっていたとして、何らかの景品が貰えるわけでもないのだから悔しくもなんともない。

「そうか。だけどたかだか壺だろ？半年もただ働きしてるんだから、もうそろそろ借金の返済も」

ふん、とオッサンは鼻で笑ってオレの言葉を一蹴した。

「半年？ 半年だと？ 笑わせるんじゃない、貴様は自分が後どれ

くらい働けば全ての壺を弁償できると思っている?」

あれ、もしかして一個何十万もする壺が混じってたりとか?おいおいやべえぞ、オレのライトノベルを買う金はいつになったら入るんだコラ。

「んー、一年くらい?」

「百八十二年だ」

「……は?」

「百八十二年だと言っている」

ひゃ、ひゃくはちじゅうにねん?

なんだそれ、1・8世紀じゃねーか!そんなもん死んでも返せんぞ!

えーと、オレの給料が月に五十万だろ?

それが百八十二年分だから……

十億九千二百万円！？ 手取り五十円の俺にどうしろと！？

「ふん、貴様は死ぬまでタダ働きだな」

「そ、そんな馬鹿な……」

「なんなら今から車にでも突っ込むか？ 心配せずとも、貴様にはたんまりと生命保険をかけてあるからな。死ぬ前に今生の憂いを断ち切るのもいいだろう」

な、なんてやつだ。これが人間のやることか！

その時、オレのスカートから茶色の封筒が床に落ちる。  
その際、封筒からはチャリン、という小銭の音が鳴った。

「あ、やべ」

ささっ、と封筒を拾い上げて服の中に隠す。

この封筒の中に入った金は、読み終わったライトノベルを古本屋に売ってきた金だ。

本当は一度読んだライトノベルを手放すのは心苦しいのだが、新しいライトノベルとの出会いを考えれば苦渋の決断である。

「……ほう、少しだが金を持っているようだな」

オレが封筒を隠したのを見て、ニヤリと魔王のような邪悪な笑みを浮かべるオツサン。

「壺の価値にはほど遠いが、金は金だ。とりあえずはそれを渡してもらおう」

や、やばい。この金を持っていかねれば、本格的に無一文だ。なんとか取られまいと、後ろ歩きでオツサンとの距離を取る。

そんなオレを見て、オツサンもじりじりとオレの方に近づいてくる。

「　　つとー!？」

不意に躓き、尻もちをついてしまう。

それでもなんとか魔王の手から逃れようとするが、距離は縮まっていくばかり。

「（仕方ない……！恨むなよ、オツサン）」

すーっ、と息を吸い込み、大声を出す。

「きゃー！　　たーすーけーてー！　　おーかーさーれーるー！」

屋敷中に響き渡る悲鳴。その悲鳴を聞きつけたのか、一気に屋敷中ががやがやと騒がしくなる。

程なくして、屋敷に駐在している警備員の二人がこちらに向かって走ってくるのが見えた。

「だ、旦那様!？」

「まさか、旦那様が犯罪を……?」

信じられない、といった表情をしている警備員たちだが、オレたちの置かれている状況を見て表情に真剣さが戻る。

片や尻もちをついて怯えの表情を見せるオレ。

片や美少女の服に手をかけ、邪悪な笑みを浮かべているオッサン。

「助けてください! 旦那様に、無理やり……!」

裏声で悲壮な少女の役を演じる。

よよよ、と目尻に手を当てて涙を拭うフリをする。

「デタラメばかり抜かしおって……今日と言う今日はただでは置かん!」

オッサンの手がメイド服の中に突っ込まれる。

これには流石に必死で抵抗をし、オッサンの手を掴んで悲鳴を上げる。



その光景を見た二人の警備員は互いに顔を見合わせ、同時に頷く。

結論　　有罪。

警備員が二人掛かりでオッサンを羽交い絞めにする。

「な、なんだ貴様らは!?!」

「旦那様、お話は警備員室で聞きます」

「もしもし、警察ですか？ たった今、婦女暴行容疑の男を確保したのですが　　」

一人の警備員が携帯を片手に警察へと連絡をし始める。

これには流石にまずいと思ったのか、オッサンも慌てはじめる。

「待て！ 私は何もやっくらん！」

「犯人はみんなそう言うんですよ、さあ行きましょう」

「だから私は　　！」

何やら言い争いながら、オッサンは警備員に屋敷の外へ連れ出され

ていった。

「オレのライトノベル代は守られたな」

くくっ、と喉を鳴らし、高らかな笑い声を上げる。

「この屋敷を支配していた魔王ゲンゾーは倒れた！ 勇者サクラがこの屋敷に平和を取り戻したのだ！」

気分はどこぞの勇者様。手に持っていた箒を勇者の剣代わりにぶんぶん振り回しながら、屋敷の中を進んでいく。

ガチャーン！

「あ、やべ……また壊しちゃった。で、でも大丈夫だろ！ 魔王は滅びたわけだし！」

鼻歌を歌いながら、オレは自室への道を歩く。

だがオレはこの時まだ気づいては居なかった。一部始終を物陰から監視していた、メイド長という名の魔王の手先の存在に。

「ふふふ……メイド長は見た！ 桜、犯人はお前だ」

結局その後、オッサンの無実が証明され、オレはツキに身ぐるみを  
全て剥された後に封筒の金を持っていかれてしまったのだった。  
更には半年の給料半減。

悪いことをすれば二倍返して自分の元に返ってくると実感した一日  
だった。

## 06 オッサンは魔王だ（後書き）

桜、痛い目を見る。の巻でした。

突然ですが当小説のアンケートにご協力ください。

? ・一話ずつの文章の長さはどうですか？

? ちよつどいい！

? まあ普通。

? 短げえ！もつと書けオラー！！

? 長げえ！読み辛いんだよ、氏ね！！

? ・お話の面白さはどうですか？

? 最高！！

? まあ読めなくもない。

? つまらん、氏ね。

? ・主人公である桜の性格についてどう思いますか？

? 可愛い！

? 面白い！

? つざい

? 氏ねばいいと思うよ？

? ・作者の更新頻度はどうですか？

?この調子で頼む

?もつとゆつくり書いてもいいのよ

?お前に足りないものは、それは

さ勤勉さ!

情熱思想理念頭脳気品優雅

そしてエなによりもオ

速さが足りない!

?今までに登場したキャラや未登場の原作キャラで、こいつをもつと出せ!というのがありましたらご自由にお書きください。

?この小説に関する意見や感想、作者を罵倒したいことなど何でもござ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3472ba/>

---

オレはメイドだ

2012年1月14日01時01分発行